

日本結核病学会関東支部学会

—— 第173回総会演説抄録 ——

平成30年2月17日 於 秋葉原コンベンションホール（東京都千代田区）

（第228回日本呼吸器学会関東地方会と合同開催）

会 長 猪 狩 英 俊（千葉大学医学部附属病院感染制御部）

—— 一 般 演 題 ——

1. 結核性髄膜炎による水頭症に対して神経内視鏡下脳室中隔穿孔術が効を示した1例 °猪狩英俊・竹内典子・渡辺 哲・石和田稔彦・山岸一貴・高柳 晋・櫻井隆之・谷口俊文（千葉大医附属病感染制御）村井尚之・池上史郎・岩立康男（同脳神経外）

10代後半の女性。結核性髄膜炎と診断され治療を開始した後に、水頭症を発症した。脳室腹腔シャントを行った後も左側脳室が拡大し意識レベルの低下がみられたため、当院、脳神経外科へ紹介された。神経内視鏡による観察では、脳室炎の所見が広範囲にみられ、Monro孔の閉塞がみられた。中隔穿孔と脳室内洗浄を行った。手術後は、抗結核薬とステロイドを継続し、意識障害は改善した。

2. C型肝炎合併肺結核症におけるレジパスビル／ソホスビル配合剤の使用経験 °松崎 敦・増山英則（国際医療福祉大市川病）

63歳男性。度重なる薬疹により治療中断を余儀なくされた。EB耐性でありRBT, PZA, SM, LVFXにて治療を再開したところ薬疹に加え肝機能障害が出現した。HCV抗体陽性、HCV核酸定量5.1 LC/mL, ゲノタイプ1型の慢性C型肝炎と判明した。レジパスビル／ソホスビル療法によりウイルスの駆除に成功した。その後の治療にて副作用の出現はみられていない。繰り返す薬疹によりリンパ球が障害され、肝炎ウイルスが活性化された可能性がある。

3. 肺内に穿破した縦隔リンパ節結核の1例 °下田真史・奥村昌夫・佐々木結花・大藤 貴・山名一平・森本耕三・宮元 牧・吉森浩三・倉島篤行・尾形英雄・後藤 元（結核予防会複十字病呼吸器センター）

症例は27歳男性。X年8月下旬より38度を超える発熱、咳嗽持続し、9月近医に不明熱の精査目的にて入院。胸部CTにて縦隔リンパ節腫脹を認め、喀痰検査を施行したところ、抗酸菌塗抹陽性、PCRにて結核菌群陽性にて

当院に紹介入院となった。抗結核薬にて治療中リンパ節の増大を認め肺内に穿破した所見が認められたが、ステロイド併用にてその後軽快し治癒した。治療中肺内に穿破した症例は稀であり文献的考察を加えて検討する。

4. *M. kansasii* 症の治療中に初期悪化を認めた1例

°廣石拓真・鹿野幸平・巴山紀子・藤田哲雄・天野寛之・中村 純・中村祐之（船橋市立医療センター呼吸器内）平野 聡（同腫瘍内）多部田弘士（同緩和ケア内）

50歳男性。X-4年に関節リウマチの診断、X-1年より生物学的製剤の治療を開始した。X年6月、IGRA陽転化したため当院紹介受診した。胸部CTで空洞性病変を認め、気管支鏡検査後に肺結核として治療を開始した。同年7月、胸部X線写真で一過性の陰影増悪を認めた。後日気管支鏡検査検体から *M. kansasii* を検出した。今回われわれは生物学的製剤使用中に併発した *M. kansasii* 症の治療中に初期悪化を認めた1例を経験し、文献的考察を加え報告する。

5. 腹膜炎を合併し治療に難渋した腸・肺結核の1例

°藏本健矢・清水 圭・山本祐介・名和 健（日立総合病呼吸器内）永瀨美帆・鴨志田敏郎（同消化器内）坂田晃子（同病理診断）

症例は55歳男性、建設業。1カ月前からの発熱、腹痛、水様便を主訴に受診した。CT検査で両肺上葉の粒状影、回盲部腫瘍、大量腹水、大網脂肪織の混濁、および播種結節を認めた。回盲部腫瘍からの生検、腹水検査、気管支鏡により肺結核、腸結核、結核性腹膜炎と診断した。回盲部狭窄にステントを留置し、抗結核薬を開始した。経過中に腹膜炎による腸閉塞を反復し治療に難渋している。文献的考察を加え報告する。

6. 血行播種の合併が考えられた慢性細菌性散布肺結核症（岡2B型）の1例 °田地広明・藪内悠貴・後藤

瞳・野中 水・笹谷悠惟果・秋山達也・石川宏明・荒井直樹・兵頭健太郎・根本健司・三浦由記子・大石修

司・林原賢治・齋藤武文（NHO茨城東病胸部疾患・療育医療センター内科診療部呼吸器内）

慢性細葉性散布肺結核症（岡2B型）は初感染に血行散布，進展に経気道散布が関与する。血行播種を合併した自験例を報告する。48歳女性，主訴は食欲不振，体重減少。胸部CTで粗密の病変分布差をもつ小葉中心性粒状影，喀痰中に結核菌を認めたことから，岡2B型と診断した。さらに血液培養から結核菌を検出し，血行播種性結核症の合併と診断した。菌量の少ない肺結核として知られている同病態に血行播種は稀と考えられ報告する。

7. 自験播種性結核症例の検討 °後藤 瞳・藪内悠貴・野中 水・笹谷悠惟果・秋山達也・田地広明・荒井直樹・石川宏明・兵頭健太郎・根本健司・三浦由記子・大石修司・林原賢治・齋藤武文（NHO茨城東病胸部疾患・療育センター内科診療部呼吸器内）

近年の結核罹患者は高齢化し，免疫抑制治療の影響もあり，病態が複雑化している。播種性結核症例の最近の病態を明らかにする目的で後方視的検討を行った。対象は，2007年1月から2017年9月までに当院で診断した自験結核780症例中，播種性結核と診断した47例（6%）。女性23名，男性24名，年齢中央値は78歳。X線写真で粒状影を認めず，尿・喀痰抗酸菌培養陽性となった症例を7例認めた。その他，臨床的背景と臨床経過に関し報告する。

8. 透析導入期に発症し，骨髓生検を契機に診断に至った粟粒結核の1例 °小澤貴裕・遠藤 駿・笹原有紀子・原 哲・今瀬玲菜・島田裕之・山内秀太・榊原ゆみ・神 靖人・稲瀬直彦（平塚共済病呼吸器内）

79歳男性。末期腎不全で透析導入後第10病日より発熱を認めた。不明熱として精査を行ったところ，当初胸部

CTでは陳旧性肺結核の所見のみであったが，骨髓生検で類上皮細胞肉芽腫を認め，尿，胸水培養より結核菌が検出され診断に至った。初発時からその後，粟粒結核を疑う所見を認めるまでに2カ月必要とした1例を経験したので報告する。

9. 粟粒結核に半月体形成性腎炎が合併した1例 °矢野光一・和田暁彦・村田研吾・北園美弥子・川合祥子・宮腰 純・橋 昌利・佐藤 祐・山本美暁・竹内孝夫・大橋佳奈・高森幹雄（東京都立多摩総合医療センター）

57歳男性。X年5月頃から倦怠感が出現し，徐々に呼吸困難が増強した。8月粟粒結核と診断され，抗結核薬が開始された。気胸発症後に鎮痛薬も開始された。その後急速な腎機能低下認め，全薬剤中止するも改善せず透析導入された。腎生検の結果，半月体形成性腎炎の診断となった。各種自己抗体は陰性であった。粟粒結核に半月体形成性腎炎が合併した症例の報告は少数であり，免疫複合体の関与が想定されている。

10. 長期観察されたが，再発時明らかな画像変化を認めなかった肺結核症の1例 °石川 哲・山岸一貴*・猪狩英俊*・山岸文雄（NHO千葉東病，*千葉大医附属病感染制御）

90歳代男性。11年前初発の肺結核症を治療。5カ月前，残存する6年前からのCTで肺の画像変化がないことと，3連痰の抗酸菌塗抹および培養陰性を確認したうえでリハビリテーションを施行。1カ月前の定期通院の際，採取した喀痰検体から *M.tuberculosis* が培養された。自覚症状はなく，CT画像で変化なかったが，さらなる3連痰で塗抹は全て陰性も2検体から培養。監視的な喀痰検査で早期発見できた貴重な再発例と考え，報告する。